

西方フェニキア都市レプキス・マグナとガラマンテス

—— 研究ノート ——

Lepcis Magna as the Western Phoenician City and the Garamantes

青 木 真 兵

キーワード：古代西地中海、リビア、フェニキア、後背地、サハラ

はじめに

前8世紀、フェニキア人によって交易港として建設されたレプキス・マグナは、カルタゴ、ヌミディアの支配を経て、前46年にローマの属州アフリカ・ノウァに組み込まれる。そしてアウグストゥス治世になり、前8年に市場、後1/2年に劇場というようにつぎつぎとローマ型の公共建築物が建てられ、そこにはラテン語碑文が飾られていった。レプキスはその後も変容を続け、後76年に自治市 *municipium*、後109年に植民市 *colonia* となった。そして後193年には、この都市の出身者であるセプティミウス・セウェルスがアフリカから初めてのローマ皇帝となった。

注目すべき点は、レプキスがローマ都市へと変容したスピードが他の属州アフリカの都市と比べて非常に早かったことである。例えば、もともと属州アフリカ・ウェトゥスの州都であったウティカは前36年に自治市の地位を得ているけれども、植民市になったのは後3世紀になってからのことであった。またヌミディア王国の王都だったともいわれるドウツガが自治市になったのは後205年で、植民市になったのは後261年である。前述のとおり、レプキスが植民市になったのは後109年なので、他都市に比べると100年ほど早い。

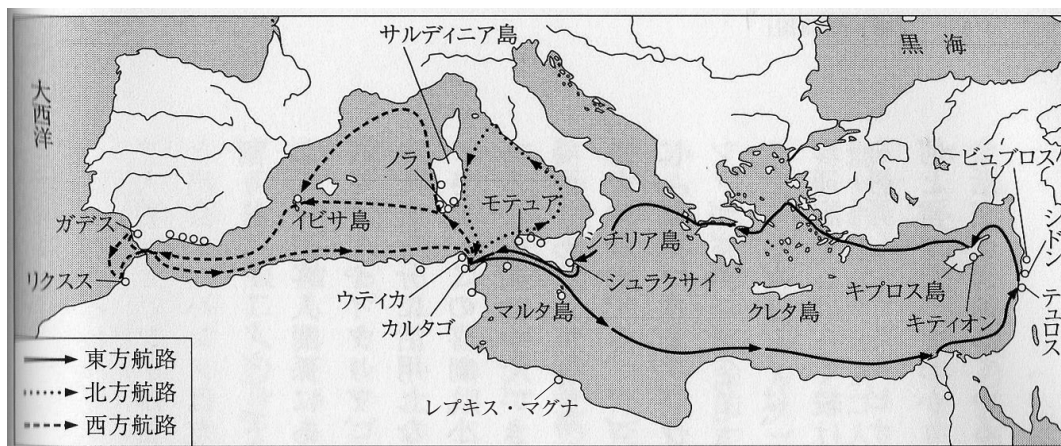
このレプキス早期発展の理由について、イギリス人ローマ考古学者マティンリは以下の二つの要因をあげる。レプキスがローマ支配の周縁にあり、そのために比較的自治を有していたこと。またレプキスはオリーブ油の生産量が多大であったため、オクタウィアヌスによる古代地中海の統一がもたらしたその需要拡大に答えることができたこと。この二つの作用によって、レプキスは例外的な早期発展を遂げたという。

しかし拙稿でも批判したように、この観点は「自治を有していればローマ都市に変容すること」を前提にしている。例えばレプキスに隣接する都市オエアは、レプキスと同じくローマ支

配の周縁にあったにも関わらず、植民市になったのは後160年代とレプキスよりもだいぶ後である。つまりマティンリが挙げる理由は、この地域全体の特徴といえるのではないだろうか¹⁾。

ともあれ、主にレプキスへの研究はローマ都市への変容を前提に語られることがほとんどである。なぜならレプキスは遺跡や碑文の残存状況が比較的良好で、ローマ都市への変容過程が追いやすく、アフリカ出身者として初のローマ皇帝セプティミウス・セウェルス帝を生んだ都市でもある。このような事実が、レプキスを特に考古・建築学的研究において「ローマ化した都市のモデル」であるかのように位置づけている²⁾。本稿では、ローマ都市としてではなく、西方フェニキア都市の中にレプキスを位置づけ、特に後背地との関係における特徴を明らかにする。

1. 西方フェニキア都市の特徴



地図① カルタゴを中心とした交易ネットワーク
(栗田伸子、佐藤育子『通商国家カルタゴ』講談社、2009年、160頁を修正)

フェニキア人の西方植民活動は前12世紀末にまで遡ると言われる。彼らは地中海沿岸を航海し、北アフリカ、イベリア半島、シチリア島、サルディニア島などに交易港をつくった。このフェニキア人の西方植民活動については、スペインの考古学者 M. E. オーベの著作『フェニキア人と西方』に詳しい。結果的に彼らの植民活動はカルタゴを中心とするものになり、それらはキプロスやクレタからジブラルタルまで、さらに地中海を超えることもあった(地図①)。

よく知られるように、古代地中海における航海は反時計回りの海流に沿って行われた。最初期にフェニキア人がつくった植民市はガデス、リクスス、ウティカだが、これらは文字史料によって年代付けられているだけで考古資料の裏付けはとられていない³⁾。一方レプキスは前8世紀に建設されたと考えられているが、このころはまだギリシア人も西地中海に進出しておらず、カルタゴが徐々に覇権を確立する過程の時期であった。

オーベは、西地中海世界におけるフェニキア人の植民活動を立地の上で三つに区分している。第一は「中央地中海」、第二は「西地中海」、そして第三は「さらなる西方」である。本章では、三つに区分されたフェニキア人の西方植民活動の後背地との関係を見る。ここで注意しなければならないのは、フェニキア人の植民活動は根拠とする資料によってその開始年代が大きく変わってくることである。

歴史資料はフェニキア人の西方植民活動を前12紀まで遡らせているが、その植民地からは前8世紀より前に年代付けられる考古資料は出土していない。そしてこの約400年間は現地民と交易のみを行い植民には至らなかった、「プレ植民段階」として位置づけられている。交易のみを行ったために考古資料が残らなかったと説明されるのだ。

オーベはこの「プレ植民段階」説に批判的だが、ギリシア人の植民活動との対比で考えた場合、この仮説は一定の説得力を持っている。一般的に、ギリシア人は農地を求めて植民活動を行ったのに対し、フェニキア人は商売をその第一の目的としていたと説明される。例えばシチリア島におけるギリシア人の植民活動が、その現地民であるシケル人との間に抗争を招いたとの対照的に、フェニキア人は現地民を交易相手と考えていたため非侵略であった。また栗田伸子氏は、歴史資料においてフェニキア人の西方植民活動が始まったとされる前12世紀という時代が、東地中海世界の大きな画期であったという事実がこの「プレ植民段階」説の説得力を支えていると述べており、本論ではこの「プレ植民段階」があったと想定し論を進めていく。

まず「中央地中海」の植民都市には、シチリア島やサルディニア島そして北アフリカがあげられる。この地域におけるフェニキア人の植民活動を考える際に重要となるのは、ギリシア人との関係である。トゥキュディデスは、最初にフェニキア人は島中の岬や海岸近くの小島に住み着いて現地のシケル人と交易していたが、ギリシア人が入植してくると北西部のモティアやソレントゥムとパノルムスに移っていったことを述べている^{iv}。そして考古資料は、シチリア島西部のフェニキア植民都市がギリシア人の入植後に建設されたことを示しており、このトゥキュディデスの記述を裏づける形になっている^v。

シチリア島西部はエトルリアやカンパニアと交易をする際、ギリシア人のおさえるメッシーナ海峡を通過せずすむという利点があった。さらに重要だったのは、北アフリカやサルディニア島にも近かったということである。フェニキア人がサルディニア島に植民した理由は、鉱物資源が豊富であったことに由来する。ノーラで見つかった碑文は前9世紀末から前8世紀を示しているが、この年代設定が正しいならば、フェニキア人がサルディニア島に定住したのはカルタゴが建設されたのと同じ頃となる^{vi}。

またサルディニア島におけるフェニキア人の「プレ植民段階」の活動は、ヌラーゲ文明を有した現地民との間に相互作用を生んだと考えられている。島には青銅を铸造する産業が発展し都市が生まれたが、その背景にはフェニキア人がオリエントの文化を持ち込んだ可能性がある。先ほどのノーラの碑文に登場するプメイ神はキプロス島と密接な関係があることから、キプロ

ス島のフェニキア人との関係も推測されている^{vii}。

北アフリカの重要なフェニキア都市といえばウティカである。現在ウティカは内陸に位置する遺跡だが、当時は岬の入江の近くに立地していた。西方フェニキア都市の中でもガデスとリクスと並ぶ最古のものと考えられており、ウティカはフェニキアの地へ帰る途中の停泊地としての役割を担っていた。

次は「西地中海」である。オーベは主にスペイン南部のアンダルシア沿岸と、イビサ島を取り上げている。まずアンダルシアではグラナダ、マラガ、アルメリアの湾や入江の低い突出部の海岸に小さな集落と共同墓地があったことが明らかになっている。フェニキア本土の都市と異なり、アンダルシア東部のフェニキア都市は小さく質素であったが、サルディニア島の場合と同様、フェニキア人の植民はイベリア半島の現地民に対して大きな影響を与えた。とりわけ前8世紀末から前7世紀には明らかにオリエントの影響が見受けられる。

そしてバレアレス群島のイビサ島は、ジブラルタル海峡を越えていく船にとっても、越えてきた船にとっても重要な港であった。入植した理由は停泊地としての役割や交易の他に、鉱山への関心があったと考えられる。島からは銀を含んだ鉛の鉱石が大量に見つかっている。またイビサ島にはスペイン北部の内陸部やフランス南部との交易を仲介する役割があった^{viii}。

最後は「さらなる西方」で、ジブラルタル海峡を越えた先のフェニキア都市について語られる。代表的な都市はガデスである。ガデスは現在のスペイン大西洋側の港町カディスである。最初にフェニキア人が居住したエリュティア島はグアダレーテ川の河口の真向かいにあたり、この川は銀山と直接つながるグアダルクヴィル川へと通じていた。他にはモロッコの大西洋岸につくられたリクススがあげられる。この都市も後背地の鉱物資源に至る川と密接な場所に築かれている^{ix}。

以上、西方フェニキア都市を三つに分類しその特徴を述べた。初期に建設されたガデスやリクスなどの都市は鉱物資源の獲得を目的につくられたが、その後停泊地としての役割や現地民との交易を目的にした植民も行われた。しかし本稿で主に参照したオーベもマーコウもレブキスについては言及していないし、一般的にレブキスが語られるのはローマ時代になってからのことだというのは前述のとおりである。

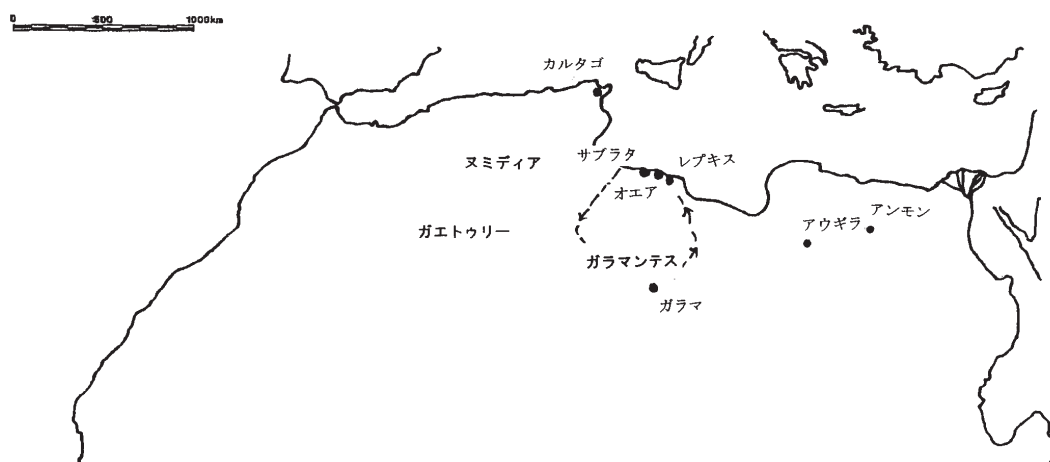
確かにレブキスは西方フェニキア都市の最も東端に位置しており、カルタゴを中心とした西地中海世界の主要な交易圏からはずれている。そしてそれが支配の周縁である由縁なのだが、ローマ時代以前のレブキスにはどのような特徴があったのだろうか。次章では、西方フェニキア都市としてのレブキスの特徴を探るべく、レブキスとその後背地の関係について考察する。

2. レブキスにおける後背地の特徴

レブキスの後背地との関係において最も重要なのはオリーブ油である。レブキスはカルタゴの支配下においてオリーブ油で重税を課せられていたし、さきに挙げた考古学者マティンリは

初期ローマ帝国下におけるレプキスの早期発展の理由を、都市の自治とともに「オリーブ油が大量に生産できること」を挙げている。

しかしこの説だけでは、なぜレプキスだけが変容して隣の都市オエアがそうはならなかったのかの説明がつかない。レプキスだけがオリーブ油の大量生産ができたのだろうか。本章では後背地のもう一つの要素に焦点をあて、特に時間軸を幅広くとり、この地域の特徴を明らかにする。参考になるのは以下の記述である。



地図② 前20年に行われた遠征ルート (D. J. Mattingly, ed., *The Archaeology of Fazzan vol.1, Synthesis*, London, 2003, p.80を基に著者作成)

「この山脈を越えると砂漠があり、それからテルガエと呼ばれるガラマンテス族の町、そしてまたデブリス（その近くに一つの泉があって、その水は正午から夜半までは煮湯のように熱いが、夜半から正午までの同じ時間は凍るように冷たい）とガラマンテス族の有名な首都ガラマがある。これらの場所はすべてコルネリウス・バルプスによって征服され、ローマ軍によって制圧された。このコルネリウスは凱旋式を与えられたが、この名誉を与えられるということは外国人にはかつてなかったことだ。そして市民権も与えられた。というのは、彼の生国はガダスであったが、彼はその大伯父バルプスともども市民権を与えられたからだ。それからまたこういう珍しいことがある。というのは、彼のわが国の著述家たちが、上述した町々は彼によって征服されたものとしてその名を伝え、そして次のように述べたことである。すなわち、彼自身の凱進行進において、キダムスとガラマを除く、すべての種族と都市の名と画像が運ばれ、その順序は次のようであったと。それはタブディウムの町、ニテリス種族、ミルギス・ゲメラの町、ブベイウムの種族あるいは町、エニビ種族、トゥベンの町、黒山として知られている山、ニティブルム、ラブサと呼ばれる町々、ウスケラ種族、デクリの町、ナタブル河、タブサグムの町、ダレバリ河、それからパラクム、ブルバ、アクシトゥ、ガルサ、バラ、マクサラ、キザニアの一連の町々、そしてギュリ山、その画像の前を、これは宝石を産するところであると

いう題言が進んで行った^v。」

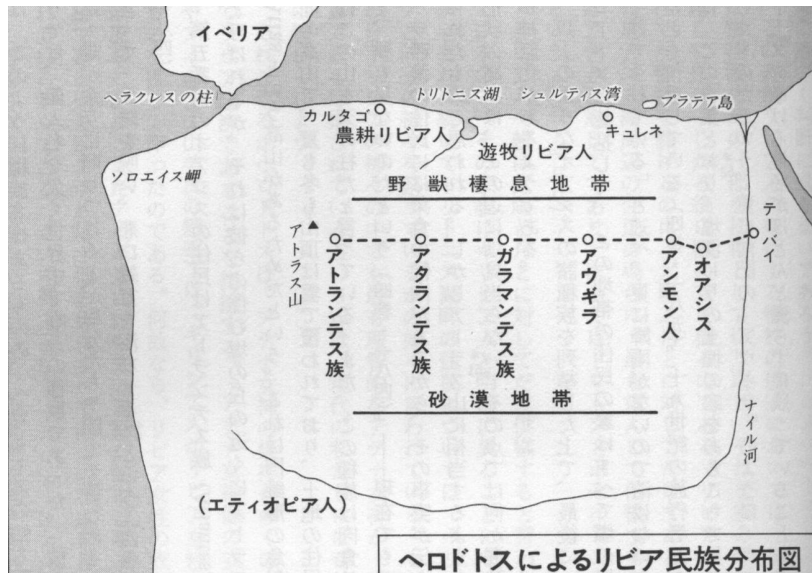
この記述は前19年5月27日、都市ローマで挙行された凱旋式の様子を表している。コルネリウス・バルブスというローマの将軍が、その前年である前20年にガラマンテスへの遠征で勝利したために凱旋式は行われた。遠征が行われたガラマンテスとは現在のリビア中央部フェザン地方のことで、沿岸部から500km以上南下していった所である（地図②）。矢印はバルブスの遠征ルートを示している。

一般的に、リビア中央部が前1000年ごろからイスラム化する後700年ごろまでの間をガラマンテス時代と呼ぶ。ガラマンテス遠征について語っているのは紀元後1世紀のローマ人大プリニウスだけだが、ガラマンテスについてはヘロドトスもリビア（アフリカ）について解説する際に言及している。

「アンモン人につづいて、砂の台地をさらに十日進んだところに、アンモン人の土地にあるのと同じような丘と水があり、そのまわりに住民がいる。この土地の名はアウギラという。ナサモネス族がココ椰子の実を採取にくるのはこの土地である。アウギラからさらに十日進んだところに、また塩の丘があり水や実のなるココ椰子が多数あることは、他の場所と同様である。ここの住民の名はガラマンテスといい、きわめて多数の人口を有する種族で、塩の上に土を運んで種子を蒔いている^{vi}。」

ここでヘロドトスは「アンモン人の土地にあるのと同じような丘と水があり」と述べているが、このアンモンとは現在のエジプト西方砂漠にあるシーワ・オアシスのことである。さらにアウギラという地名にも言及している（地図③）。またヘロドトスの世界観を示す図として地図③をあげる。そして、紀元前後を生きたストラボンもアンモンとアウギラとの関連を述べている。

「話によると、大シユルティス湾のうちアウトマラに面した湾奥部あたりから出発して陸路を冬季の日の出方向へとると、4日目にアウギラ市へ着く。この場所はアンモンに似て、やし樹が育ち水も豊かである。ここはキュレナイア地方から見て南方の内陸にあたり、100スタディオン（18キロ）までの間では樹木も育つほど地味があるが、もう100スタディオンまでの間では種ものを播くことだけはするものの、乾燥地帯だから米造りの出来る土地ではない。これら（オアシス）の場所から上の方はシルピオンの産地で、それからは定住者のない地方とガラマンテス族の土地になる^{vii}。」



地図③ ヘロドトスのリビア観（藤縄謙三『歴史の父ヘロドトス』新潮社、1989年、185頁）

ヘロドトスの「塩の丘、水、ココ椰子」などの記述やストラボンの記述から、ガラマンテスの地はシーワオアシスと同じような場所、すなわちオアシス地帯であったことがわかる。ヘロドトスと同様に、ストラボンもアウギラとの関連の中でガラマンテスについて触れ、ガラマンテスはさらに奥地にあると述べる。おそらくストラボンの世界認識もヘロドトスと大きな差異はないであろう。またヘロドトスは、ガラマンテスの人びとについて以下のように述べる。

「これよりさらに南の奥地の、野獣の多く棲息する地域にはガラマンテス人が住む。この種族はいかなる人間も避け、誰とも交際せず、また武器類は一切持たず、自衛の手段も知らない^{xiii}。」

ヘロドトスは、アウギラという土地の近くに住むナサモネス人について述べた後、「さらに南にも人間が住んでいる」といささか驚きを込めて記し、ガラマンテス人をあたかも「野蛮人」のように描写している。しかしギリシア史家藤縄謙三は、ヘロドトスが「ガラマンテス人」とする人びとについて記述の中で矛盾が生じていると指摘する^{xiv}。その一方で、ストラボンはガラマンテスまでの具体的な数字を示している。

「カルタゴ市からケパライ岬またはマサイ・シュリオイ族の地方へかけての沿岸地帯より上の方にリボ・フェニキア人の土地があって、これがガイトゥロイ族の住む山岳地帯にまで達する。この山地はすでにリビュア地方に属する。そして、この山地より上の方にこれと平行してガラマンテス族の土地があり、カルタゴ石をここから運び出す。話によると、この部族は大洋オケ

アノス沿岸地帯のエチオピア族から9-10日間の旅程だけ離れ、アンモンからだとも15日間分も離れている^{xv}。]

ストラボンは伝聞の形でガラマンテスへの「遠さ」について述べており、ガラマンテスはアフリカの奥地にあると認識されていたと考えることができる。アンモンは、前4世紀にアレクサンドロス大王が苦難の末に辿りつき、それ以前にはバルシア王カンビュセスの遠征隊が到達できなかった場所として知られていたはずで、そのアンモンからガラマンテスはさらに離れた場所にあると考えられていた。

以上のように地中海沿岸から遠く離れたガラマンテスの地に対し、地中海世界に住む人びとが正確な認識を持っていたとは考えがたい。というのも、マティンリガリビア中央部で行った「ファザン・プロジェクト」によると、ガラマンテス人はギリシア・ローマ側の史料が語るような「砂漠に住む野蛮人」であったわけではなく集約的灌漑農業を営んでおり、そこでは小麦、ぶどう、オリーブ、ナツメヤシが育てられていたという^{xvi}。このようにガラマンテスの地は当時の地中海世界に住む人々の中に具体的なイメージを持って存在していたとは考え難い。

ただガラマンテスは「宝石の産するところ」であった。先ほど挙げた記述の中で、ストラボンは以下のように述べていた。

「カルタゴ市からケパライ岬またはマサイ・シュリオイ族の地方へかけての沿岸地帯より上の方にリボ・フェニキア人の土地があつて、これがガイトゥロイ族の住む山岳地帯にまで達する。この山地はすでにリビュア地方に属する。そして、この山地より上の方にこれと平行してガラマンテス族の土地があり、カルタゴ石をここから運び出す。話によると、この部族は大洋オケアノス沿岸地帯のエチオピア族から9-10日間の旅程だけ離れ、アンモンからだとも15日間分も離れている^{xvii}。]

ここでストラボンは、リビュアの沿岸部に住むガイトゥロイ族の南に、ガラマンテス族の土地があり、そこからカルタゴ石を運び出すと述べている。プリニウスによると、カルタゴ石とは赤い色をした瑪瑙の一種で、中でもインド紅玉とガラマント紅玉と呼ばれる種類の価値が高い。そしてギリシア人は、ガラマント紅玉がカルタゴの富を連想させるとして、カルタゴ石と呼んだという^{xviii}。しかし別の箇所ではプリニウスは、宝石の中ではそれほど価値の高いものではないとも述べている^{xix}。

また、ガラマンテスの地のイメージを少しでも明らかにしてくれるものとして、ガラマンテスの中心地である首都ガラマがあつた場所で行われた発掘調査によって得られた情報をまとめたものを手がかりとする（表①）。

輸入元	出土遺物
アレクサンドリア	ガラス、ファイアンス製陶器、木製枕
ギリシア世界	黒・赤釉陶器、アンフォラ
スーダン	象牙、金
西地中海世界	黒・赤釉陶器、アンフォラ

表① ヘレニズム時代の遺物 (D. J. Mattingly, *Tripolitania*, The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1994と D. J. Mattingly, ed., *The Archaeology of Fazzan vol.1, Synthesis*, London, 2003より著者作成)

表①は、ガラマンテスにヘレニズム時代から、アレクサンドリアやギリシアなどの東地中海世界の文物がもたらされていたことを示している。さらにサハラ以南からは象牙や金が運び込まれている。地中海世界における象牙の価値は非常に高いもので、プリニウスは鼈甲と並べてその高い価値を賞している^{xx}。

また表②には、ガラマンテスに運びこまれた土器類が示してある。イタリアやギリシア世界からガラマンテスが土器を輸入している様子がわかる。これらの出土遺物が示している事実はガラマンテスがギリシアやイタリアと直接結ばれていたというよりも、沿岸部のフェニキア都市を経由してガラマンテスの地へ文物が輸入されていたと考えた方が良いであろう。つまり、ヘレニズム時代から沿岸部とガラマンテスの地を結ぶ南北の交易ルートは存在していた^{xxi}。またもう一つの可能性として、東西の交易ルートの存在をあげることができる。

輸入元	2-1 B.C.	B.C.1-1 A.D.	1-2 A.D.
ギリシア世界	黒・赤釉陶器 (5)、アンフォラ (2)	アンフォラ (5)	シギリタ (3)
イタリア	黒・赤釉陶器 (9)、アンフォラ (7)		シギリタ (24)
北アフリカ	アンフォラ (12)	アンフォラ (3)	赤釉陶器 (26)

表② ガラマンテスの地へ輸入された土器群 (D. J. Mattingly, ed., *The Archaeology of Fazzan vol.1, Synthesis*, London, 2003より著者作成)

先ほど引用したように、ヘロドトスはガラマンテスについて「塩の丘があり水や実のなるココ椰子が多数ある」ことに関して他のオアシスと同様であると述べる。ヘロドトスもストラボーンも記述の中でアンモンを引き合いに出して述べていることから、ガラマンテスをアンモンとの関連において考えてみる必要がある。アンモンとはエジプト西方砂漠の西端に位置する、現在のシーワ・オアシスのことであり、かのアレクサンドロス大王がアメン神の神託を受けるために訪れた場所である。エジプト西方砂漠のオアシス研究者ファカリーによると、古代のシーワ・オアシスには多くの神殿があり、この地域の宗教センターとして機能していたという^{xxii}。

そして古代エジプト研究者大城道則は「実は西方砂漠におけるオアシス地域は、エジプトにおいて河畔を除けば、各オアシス同士が密接に連携し、安定した定住社会を形成することが可

能な唯一の地域であった。人びとはナイル川の流を行き来するようにオアシス間を行き来した」と述べている^{xxiii}。

このように、エジプト西方砂漠のオアシスは各々が密接に関連していた。ヘロドトスやストラボンが、「アンモン、アウギラ…」の順でサハラについて語るのは、古代においてシーワ・オアシスがこの地域一体の中心だったためであり、ガラマンテスの地はそれらオアシス・ネットワークの中に組み込まれていた。つまりこの地は、北は地中海、東はエジプト、南はアフリカへと通じるサハラの要衝であったといえよう。

おわりに

西方フェニキア都市はそれぞれの後背地によってその特徴が異なる。そしてレプキスの特徴はオリーブ油の大量生産が可能だということの他に、サハラの要衝を後背地に持っていたことがあげられる。西方フェニキア都市において、後背地がオアシス・ネットワークと結びついているのは当然北アフリカだけで、これがイベリア半島やシチリア島、サルディニア島におけるフェニキア都市とは大きく異なる点となっている。

今後はオアシス・ネットワークを後背地に持つことが何を意味するのか、そしてこのガラマンテスを通じて、この地域におけるレプキスとその隣都市オエアとの差異とその関係を考察していく。

注

- i 拙稿「アウグストゥス治世における西地中海世界の変容—フェニキア都市レプキス・マグナへの考察から—」『関西大学博物館紀要』第18号、2012年、11頁。
- ii F. B. Sear, “The theatre at Leptis Magna and the development of Roman theatre design”, *JRA* 3, 1990, pp.376-382; J. B. Ward-Perkins, P. Kenrick (ed.), *The Severan Buildings of Lepcis Magna: An Architectural Survey*, Tripoli, 1993; W. Ball, *Rome In the East*, London and New York, 2000等を参照。
- iii 栗田伸子、佐藤育子『通商国家カルタゴ』講談社、2009年、90-96頁。
- iv Thucydides, *VI*, 6.
- v グレン・E・マーコウ著、片山陽子訳『フェニキア人』創元社、2007年、234-235頁。
- vi M. E. Aubet, *The Phoenicians and the West Second Edition*, Cambridge, 2001, p.206; 栗田、佐藤、96-100頁; マーコウ、237頁。
- vii マーコウ、236頁。
- viii Aubet, p.344; マーコウ、251頁。
- ix マーコウ、252頁。
- x Plinius, *V*, 5, 36-37.
- xi Herodotus, *IV*, 182-184.
- xii Strabo, *XVII*, 3, 23.
- xiii Herodotus, *IV*, 174.
- xiv 藤縄謙三『歴史の父ヘロドトス』新潮社、1989年、184-186頁。

- xv Strabo, *XVII*, 3, 19.
- xvi D. J. Mattingly, ed., *The Archaeology of Fazzan vol.1, Synthesis*, London, 2003, p.75.
- xvii Strabo, *XVII*, 3, 19.
- xviii Plinius, *XXXVII*, 91-92.
- xix Plinius, *XXXVII*, 104.
- xx Plinius, *VIII*, 31; Plinius, *XXXVII*, 204.
- xxi R. Birley, *The African Emperor. Septimius Severus*, London, 1988, pp.8-9.
- xxii A. Fakhry, *The Oases of Egypt volume 1 siwa oasis*, Cairo, 1973, pp.143-172.
- xxiii 大城道則「古代エジプトにおけるハルガ・オアシスの存在意義—エジプト西方砂漠とナイル世界とのネットワーク—」『駒澤大学文学部研究紀要』第66号、2008年、89頁。